

氏名（本籍）	おおむら そういちろう 大村 聡一郎（島根県）
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	乙第 1071 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	「日常／非日常」概念を通じた篠原一男の建築観の変遷 - 言説及び住宅作品の分析を通して -

論文審査委員	（主査）教授 坂牛 卓
	教授 郷田 桃代 教授 山川 誠
	准教授 熊谷 亮平 教授 岩岡 竜夫

論文内容の要旨

1950年代から設計活動を開始し、住宅を中心に建築作品を残している建築家・篠原一男は生涯を通して自身の作品を4つの様式に分類し、設計のスタイルを時期によって変更している。また、それぞれの様式を説明する言説を多く残している。具体的には、「日本伝統の建築」との対応を主題とした「白の家」に代表される第1の様式（1954-1968）、「亀裂の空間」、「新しい機能空間」などの概念を主題とした「未完の家」に代表される第2の様式（1970-1974）、「野生」、「機械」などの概念を主題とした「上原通りの住宅」に代表される第3の様式（1974-1984）、「カオス」、「プログレッシブ・アナーキー」などの概念を主題とした「ハウスインヨコハマ」に代表される第4の様式（1984）の4つの様式である。これら4つの様式は一見、明確に不連続なものに見えるが、篠原の言説において「日常/非日常」という概念が4つの様式に関わる建築概念として現れており、「日常/非日常」という概念が全ての様式を通して創作の根底にある可能性がうかがえる。そこで本論文では、「日常/非日常」概念を通して篠原の建築観の変遷を明らかにすることを目的とする。具体的には、篠原の言説における「日常/非日常」概念の4つの様式を貫く創作上の言説、及びその言説と設計との相関関係を明らかにすることを目的とする。尚、ここで設計と呼ぶものは、設計図から読み取れる建築のことである。

本論文では、主に二つの資料を分析対象とする。一つは篠原の言説における「日常/非日常」概念を通して創作の論理を明らかにするために、篠原の既発表の言説 107 篇を用いる。もう一つは篠原の設計を明らかにするために、篠原の既発表の施主が存在する実施を

前提とした計画案を含めた全住宅作品 42 作品の実施図面 1157 枚を対象とする。

本論文では、大まかに二つの分析（言説分析・図面分析）を行う。言説分析により篠原の「日常/非日常」概念の類型の変遷を明らかにし、図面分析により設計の類型の変遷を幾つかの側面から明らかにし、双方の類型の相関関係を明らかにする。言説分析では篠原の「日常/非日常」概念に関わる言説を類型化するために川喜田二郎（1920-2009）が情報整理と発想のための手法として開発した KJ 法を用いる。また、図面分析では設計を数値化し、類型化するために階層クラスター分析を用いる。これら二つの分析方法を用いて言説と設計双方の類型の相関関係を明らかにする。

言説分析では篠原の言説における意匠との関わり合いのある重要概念を抽出し、その結果として「日常/非日常」概念に着目する。また、それらが修飾する内容の変遷を分析し、各様式での「日常/非日常」概念の扱われ方、「日常/非日常」概念が指し示す内容の類型を明らかにする。ここでは、第 1 の様式から第 4 の様式までに「日常/非日常」概念が指し示す内容として「様式（日本の伝統）」、「生活」、「空間」、「実体（モノ）」、「風景（都市）」と類型が変遷していくことが読み取れる。

設計の分析では、篠原の「日常/非日常」概念との関わりが想定される以下の要素に着目して定量的分析を行う。それらは①「間」と「間」の「関係」、②「物」の「形式」、さらに「形式」を 2 つに分解し、「物」の「形」と「物」の「大きさ」、③「間」の「形」、④「間」の「大きさ」である。

「間」と「間」の「関係」の分析では、居間から個室までの構成の分析を行う。ここでは、第 1 の様式から第 4 の様式までに居間から個室の構成が変遷していくことが読み取れる。第 1 の様式では居間と個室の距離が極端に近く、廊下空間が存在しないものが多くあり、第 2 の様式になると居間と個室の間に独立したパブリックな居室空間が現れる。そして、第 3 の様式になると居間と個室の間には長い廊下空間が設けられるようになり、第 4 の様式になると独立した廊下空間が発生している。そして、各様式と言説における「日常/非日常」概念の分析結果との対応をみると、第 1 の様式での非日常空間の極大化と廊下空間を設けないという構成、第 2 の様式での日常空間・日常生活と非日常空間の並存と居間と個室の間にパブリックな居室空間が存在しているという構成との間に相関関係が見られることが明らかになる。

「物」の「形」と「大きさ」の分析では、可視化された構造の形・大きさの分析を行う。ここでは、第 1 の様式から第 4 の様式までに、構造の形・大きさが変遷していくことが読み取れる。第 1 の様式では単純な小さな構造が多く見られ、第 2 の様式になると可視化された構造がほとんど存在しない。第 3 の様式では単純な小さな構造に加え、単純で大きな構造が多く見られ、第 4 の様式になると複雑な小さな構造が多く見られるようになる。そして、各様式と言説における「日常/非日常」概念の分析結果との対応をみると、第 3 の様式の言説において日常及び新しい日常の「実体（モノ）」の存在と、他の様式と比較して実体（モノ）が表現として強く現れていることとの間に相関関係が見られることが明らかになる。

「間」の「形」の分析では、主空間の形の分析を行う。ここでは、第 1 の様式から第

4の様式までに空間の形が変遷していくことが読み取れる。第1の様式では単純な形という共通の性質を持つものが多く、第2の様式になると階段を有する形のものが多くなる。第3の様式では空間の形はバラバラである。つまりこの時期において空間の形に対する傾向は見られない。第4の様式になると空間の形は切り欠いた、且つ2つ以上の空間単位が相貫しているものが現れる。各様式と言説における「日常/非日常」概念の分析結果との対応をみると、第4の様式の時期の言説に日常の空間部品、非日常的な空間断片や形、その接合性が現れており、ここで明らかになる複数の空間単位の相貫による空間の断片化、接合性との間に相関関係が見られる。

「間」の「大きさ」の分析では、主空間の視距離の分析を行う。ここでは、第1の様式から第4の様式までに空間の大きさが変遷してくことが読み取れる。第1の様式では小さく、変化の少ない均質な空間が多く現れ、第2の様式になると比較的小さく偏平な空間が多くなる。第3の様式においては大きく、変化の多い多様な空間が多くなり、第4の様式では偏平な空間のみが現れる。各様式と言説における「日常/非日常」概念の分析結果との対応をみると第1の様式の時期の言説には非日常としての抽象空間、尺度が現れており、ここでの均質な空間、すなわち床・壁・天井方向に比較的同じ尺度を使用していることとの間に相関関係が見られる。第2の様式の時期の言説には非日常的な非合理的な空間、巨大な壁面が現れており、ここでの偏平な空間による非合理的な空間の高さ、巨大な壁面の創出との間に相関関係が見られる。第3の様式の時期の言説には日常の「なんでもないもの」の非日常的転換が現れる。ここで明らかになる巨大で変化の多い多様な空間を生み出す一因として露出した構造体等のなんでもないものが挙げられ、その間に相関関係が見られる。

以上で述べた分析により、篠原の「日常/非日常」概念は全ての様式において存在し、それは第1の様式、第2の様式では構成（関係性）・空間の大きさ、第3の様式では構造の形・空間の大きさ、第4の様式では空間の形との相関関係があることを明らかになる。以上より、「日常/非日常」概念を通した篠原一男の建築観の変遷の一端を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文では、学長からの審査の付託を受けて、標記5名の審査委員で構成する審査委員会を組織し、提出された学位論文について審査を行った。

審査委員会では、学位申請者より学位論文の内容、あるいは前回審査における指摘事項に対する対応結果について説明し、その後、質疑応答を実施し、博士論文として満たすべき条件や必要な修正点を確認する、という形式で進めた。

第1回審査では、申請者より学位論文の概要について説明があり、以下の指摘事項が挙げられた。

1. 第4の様式の作品数が少なく、傾向を断定するのが難しい。数字そのものを説明す

る方法とは異なる方法で補強する必要がある。また、計画案の位置付けを明示する必要がある。また、数値から結論までの導出、解釈の方法を詳細に述べる必要がある。

2. 副題と目的の表現を再考し、目的をもう少し詳細に明示する必要がある。
3. 「間」と「物」という定量分析の枠組みと「日常 / 非日常」の関わりを明示する必要がある。
4. タイトルにある「建築観」の説明をする必要がある。
5. 同時代の建築家との対比を多少説明する必要がある。
6. 言説分析の結果をもとに定量分析の選定方法を明示する必要がある。
7. 既往の篠原研究との差を明確にする必要がある。
8. 結論では論文全てを通して総じて述べる必要がある。

第 2 回審査では、申請者に本論文概要を英語で発表を行ってもらい、申請者より第 1 回審査における指摘結果に対する対応結果について説明があり、以下の指摘事項が挙げられた。

1. 数値の明示、もしくは時系列でまとめた表等を示して、客観的に把握できるようにできないか。
2. 本論文における「構造」の説明を明確にする必要がある。
3. 様式との対応を説明する時に他のクラスターを除く理由を明示する必要がある。
4. 時代性を俯瞰できる説明を追加できないか。
5. 篠原の日常性とは一種の社会性ではないのか。
6. 6章の定量分析の選定方法の後半の説明はいらぬ。
7. 既往研究との差異は「日常/非日常」に独自性があるということを強調したほうがいいのではないか。
8. 副題は「言説及び住宅作品の分析を通して」に。
9. 結論部分では「日常/非日常」の具体例を用いて、日常がベースに存在してきたと書くのはどうか。
10. 結論に不足感がある。日常の重要性を述べてはどうか。
11. 図 8-1 の場所を結論部分の手前に移動したほうが良い。
12. 対称性・反転可能性の説明が唐突なので具体的な説明の後で、述べたほうがいいのか。（
13. 非日常の生み出す方法、変遷の内容、日常がベースにあったことを述べたほうがいいのか。
14. English Abstract の修正。

第 3 回審査では、公聴会を兼ねて実施し、全体的に修正指摘という様なものはなく、質問、感想、助言、今後への展望などの下記のような発言があった。

1. タイトルの「建築観」という言葉に込められた意味合いは何か。
2. 日常、非日常の意味の変遷の理解。
3. 言葉と建築は対応していない部分もあるのではないか。

4. 篠原一男にとって4つの様式にはきちんとした変更ラインがあったわけでもなく
ファジーな部分が残されていたと思う。
5. 篠原一男はなぜ4つの様式を必要としたのか今後考えて行って欲しい。

以上3回の審査における修正を踏まえて公聴会では学外者を含めて70名の聴講者がおり、概ね好評をいただいた。また審査員からもその内容の精度が上がり価値あるものに仕上がったとの評価を得た。以上より本論文は、博士（工学）の学位論文として十分に価値あるものと認められる。